

サルデーニャ語第 2 変化動詞の直説法現在における人称語尾*

Le desinenze personali dell'indicativo presente

della seconda coniugazione nel sardo

金澤 雄介

Yusuke KANAZAWA

1. 導入

サルデーニャ語ではラテン語の *-ERE* 動詞 (第 II 変化動詞) と *-ĒRE* 動詞 (第 III 変化動詞) は合流し, 単一の屈折タイプを形成するに至った. このような動詞の屈折タイプの合流はサルデーニャ語諸方言において共通して観察され, 古サルデーニャ語の段階で既に生じていたと推定される (→ 2. 2.). 一方, 語尾については古サルデーニャ語文献においていくつかの揺れが見られ, 現代サルデーニャ語方言の間にも差異が観察される.

サルデーニャ語には大別して 2 つの方言が存在する. サルデーニャ島北部及び中央部で話されるログドーロ方言と, 島南部で話されるカンピダーノ方言である. 本稿では, ラテン語の *-ERE* 動詞及び *-ĒRE* 動詞に由来する動詞の人称語尾について, 直説法現在を中心に, 古ログドーロ方言と古カンピダーノ方言で書かれたテキスト¹⁾における現れを観察する. その上で現代に至るまでの通時的変化について考察する²⁾.

2. 考察に向けての準備

2. 1. *-ere* 動詞と *-ĕre* 動詞の直説法現在の人称語尾

<ラテン語>

-ERE 動詞 (inf. *VIDĒRE*): *VIDĒŌ, VIDĒS, VIDĒT, VIDĒMUS, VIDĒTIS, VIDĒNT* 「見る」

-ĒRE 動詞 (inf. *VENDĒRE*): *VENDŌ, VENDIS, VENDIT, VENDĪMUS, VENDĪTIS, VENDUNT* 「売る」

<現代ログドーロ方言>

(inf. *bĭere*): *bĭo, bĭes, bĭet, biđĭmus, biđĭdes, bĭent*

(inf. *bĕndere*): *bĕndo, bĕndes, bĕndet, bendĭmus, bendĭdes, bĕndent*

<現代カンピダーノ方言>

(inf. *bĭri*): *bĭu, bĭs (< *bĭis), bĭt (< *bĭit), biđĕus, biđĕis, bĭnt (< *bĭint)*

(inf. *bĕndi*): *bĕndu, bĕndis, bĕndit, bendĕus, bendĕis, bĕndint*

上に示したパラダイムから、ラテン語では異なる人称語尾を持っていた *-ERE* 動詞と *-ĒRE* 動詞の活用形が、ログドローロ方言とカンピダーノ方言それぞれにおいて同一の語尾を持つていることがわかる。しかし今度は 2 つの方言の間で差異が観察される。

2. 2. 動詞屈折タイプの再構成

ラテン語には 4 種類の動詞屈折タイプが存在した。それらは不定詞語尾 *-re* に先立つ母音の音色及び長さによって特徴付けられる：*-ARE*: *CANTARE* 「歌う」、*-ERE*: *VIDERE* 「見る」、*-ĒRE*: *VENDĒRE* 「売る」、*-IRE*: *DORMIRE* 「眠る」。サルデーニャ語ではラテン語の *-ARE* 動詞と *-IRE* 動詞はそのまま受け継がれた。しかし *-ERE* 動詞と *-ĒRE* 動詞は単一のグループに合流した。その過程を不定詞によって示すと、以下ようになる：lat. *-ARE* > log.mod. *-áre* (es. *CANTARE* > *kantáre*) = 第 1 変化動詞, lat. *-ERE* / *-ĒRE* > log.mod. *-ere* (es. *VIDERE* > *bíere*, *VENDĒRE* > *béndere*) = 第 2 変化動詞, lat. *-IRE* > log.mod. *-íre* (es. *DORMIRE* > *dormíre*) = 第 3 変化動詞。本稿ではサルデーニャ語における 3 種類の動詞変化タイプをそれぞれ第 1 変化動詞, 第 2 変化動詞, 第 3 変化動詞と呼ぶ。

ラテン語の *-ERE* 動詞と *-ĒRE* 動詞が合流した結果生じたログドローロ方言の第 2 変化動詞の不定詞は、後ろから 3 つ目の音節にアクセントが落ちるという特徴を持つ。従って第 2 変化動詞の不定詞は *-ĒRE* 動詞の不定詞のアクセント位置を継承しているといえる。

古サルデーニャ語では、ラテン語の *-ERE* 動詞に由来する不定詞が後ろから 3 つ目の音節にアクセントを持っており、既に *-ĒRE* 動詞と合流していたことを示す形式がある。例えば *deberi* (CV: 19) は後ろから 2 つ目の音節にアクセントを持つ *DEBERĒ* に遡る。この不定詞の後ろから 2 つ目の母音 *e* は *i* に変化している。このような母音の弱化は、語末音節高母音化 (→ 3. 1. 2.) によって生じた語末母音 *i* (< *e*) からの逆行同化によるものと考えられる。同化によってより共鳴性の低い母音に変化するということは、後ろから 2 つ目の音節にアクセントはなく、既に後ろから 3 つ目の音節に移動していたことを示唆するものである (i.e. *-ERE* > *-ere* > *-eri* > *-iri*)。以下にこの説明に該当する *-ERE* 動詞の例を挙げる：*nogiri* (CV: 5) < *NOCERE* 「害する」、*podiri* (CV: 17) < **POTĒRE* 「～できる」、*plakiri* (CV: 20ii) < *PLACERE* 「好まれる」。

このように、不定詞に関していえば、古サルデーニャ語において第 2 変化動詞への合流が既に生じていたと推定して問題はないといえる。一方で次章から見るように、人称語尾に関しては方言間に差異が観察され、また同一方言内においてもいくつかの揺れが見られる。

3. 考察

本章では、古ログドローロ方言及び古カンピダーノ方言における第 2 変化動詞の直説法現在の

人称語尾がどのように現れているかを観察し、その通時的変化について議論する。

3. 1. 3 人称単数, 3 人称複数及び 2 人称単数

3. 1. 1. 古ログドロー方言

以下に示す 3 人称単数の形式は、ラテン語の *-ERE* 動詞に属していた動詞である。従って語尾 *-et* はラテン語の *-ET* を継承しているといえる³ : *clompet* (CSP: 5, 10, 285, 413, 422iv), *clonpet* (CSP: 10iv, 11ii, 197, 285, 316, 385, 404. CSNT: 317) ecc. < *COMPLET* (inf. *COMPLÈRE*) 「終結する」, *plaket* (CSP: 120), *placet* (CSNT: 164) < *PLACET* (inf. *PLACÈRE*) 「好まれる」, *paret* (CSP: 146, 205) < *PARET* (inf. *PARÈRE*) 「~のように見える」, *potet* (CSP: 391) < **POTET* (inf. **POTÈRE*) 「~できる」, *remanet* (CSP: 405) < *REMANET* (inf. *REMANÈRE*) 「留まる」, *tenet* (CSNT: 155) < *TENET* (inf. *TENÈRE*) 「持つ」, *bolet* (CSNT: 80) < **VOLET* (inf. **VOLÈRE*) 「欲する」。

次に示す動詞はラテン語の *-ERE* 動詞に属していたが、人称語尾については *-ERE* 動詞に由来する語尾 *-it* ではなく、*-ERE* 動詞に由来する語尾 *-et* が含まれている。この *-et* は *-ERE* 動詞との合流に伴って二次的に得られたものと推定できる。2. 1. で示したように、現代ログドロー方言の 3 人称単数語尾は *-et* である。*-ERE* 動詞に由来する動詞において *-it* に代わって *-et* が広がった結果、現代ログドロー方言で *-et* が一般化されていると考えられる : *baet* (CSP: 293, 316ii, 378, 398ii, 403ii. CSNT: 79, 82), *uaet* (CSP: 5, 203, 294, 316) ← *VADIT* (inf. *VADÈRE*) 「行く」, *faket* (CSP: 316), *facet* (CSNT: 50) ← *FACIT* (inf. *FACÈRE*) 「作る」, *nasket* (CSP: 107) ← *NASCIT* (inf. *NASCÈRE*) 「生まれる」, *cludet* (CSP: 5, 10, 11, 404, 422, 423, 434, 425, 430. CSNT: 50, 70, 79, 82, 259, 271, 315) ecc. ← *CLAUDIT* (inf. *CLAUDÈRE*) 「閉じる」, *ponet* (CSNT: 297), *ponet(ib)* (CSNT: 69) ← *PONIT* (inf. *PONÈRE*) 「置く」。

次に挙げる動詞のグループは、ラテン語において *-IRE* 動詞に属していたが、サルデーニャ語において第 2 変化動詞に移行した : lat. *VENIRE*, **FERIRE*, **MORIRE* → log.mod. *bénner*, *fèrrere*, *mòrrere*。このような動詞屈折タイプの移行は古サルデーニャ語において既に生じていた (e.g. *benner* (CSP: 205), *offerre* (CSP: 191), *morre* (CV: 13, 17))。これらの動詞のグループは、不定詞としては第 2 変化動詞の特徴を持つが、語尾では *-ERE* 動詞に由来する *-et* の一般化は生じず、*-IRE* 動詞のものを保存している⁴ : *benit* (CSP: 10, 11, 19ii, 173, 187, 189ii, 192ii, 197, 202, 206ii), *benit* (CSNT: 294, 305iii, 315iii) ecc. < *VENIT* 「来る」, *fferit* (CSP: 256) < **ferit* 「運ぶ」, *morit* (CSP: 85) < **morit* 「死ぬ」。

一方で、本来 *-ERE* 動詞に属していたが、*-ERE* 動詞に由来する語尾 *-it* を持つ形式が観察される : *clonpit* (CSP: 110ii, 307) (cfr. *clompet* (CSP: 5, 10, 285, 413, 422iv)) ← *COMPLET* (inf. *COMPLÈRE*) 「終結する」。このように、古ログドロー方言では動詞屈折タイプの合流に伴い、*-ERE*

動詞に由来する *-et* と *-ĒRE* 動詞に由来する *-it* との間に混同が観察される。*-et* の一般化の過程におけるハイパーコレクションとも解釈できる。

次に、3 人称複数語尾について見る。以下に示す形式はラテン語の *-ERE* 動詞に由来する。従って語尾 *-en* は *-ERE* 動詞の語尾 *-ent* に由来すると考えられる⁵：*paren* (CSP: 205) < *PARENT* (inf. *PARĒRE*) 「～のように見える」、*uolen* (CSP: 66) < **VOLENT* (inf. **VOLĒRE*) 「欲する」。

次に挙げる形式はラテン語の *-ĒRE* 動詞に由来するが、語尾については *-ERE* 動詞に由来する *-en* が観察される。3 人称単数 *-et* の場合と同様、*-ERE* 動詞の語尾 *-en* が広がったものと考えられる。その結果、現代ログドロー方言では 3 人称複数語尾に *-ent* が一般化されている：*baen* (CSP: 425), *uaen* (CSP: 19, 61, 62, 412, 413, 443) ← *VADUNT* (inf. *VADĒRE*) 「行く」、*faken* (CSP: 43, 65, 195, 204, 424, 425) ← *FACIUNT* (inf. *FACĒRE*) 「作る」⁶。

続いて 2 人称単数語尾について見る。古ログドロー方言のテキストに観察される第 2 変化動詞の 2 人称単数はいずれも *-ĒRE* 動詞に由来する。そのほぼ全てに *-ERE* 動詞に由来する語尾 *-es* が観察される。この *-es* が現代ログドロー方言で一般化されている：*fakes* (CSP: 200, CSNT: 150) ← *FACIS* (inf. *FACĒRE*) 「作る」、*keres* (CSP: 185, 284ii, 365, 390, CSNT: 331) ← *QUAERIS* (inf. *QUAĒRĒRE*) 「欲する」。これに対して、*-ĒRE* 動詞に由来する語尾 *-is* を保存している形式が 1 例確認される (cfr. Wagner 1938-1939: 141n.)：*ceris* (CSNT: 224) < *QUAERIS* (inf. *QUAĒRĒRE*) 「欲する」。既に示したように、現代ログドロー方言の 2 人称単数語尾は *-es* である。しかしながら古ログドロー方言では、3 人称単数 *clonpit* に含まれる *-it* からも見取れるように、*-ERE* 動詞の語尾はまだ完全には一般化されておらず、*-ERE* 動詞と *-ĒRE* 動詞の語尾が競合している状態にあったといえる。

3. 1. 2. 古カンピダーノ方言

古カンピダーノ方言の 3 人称単数において、*-ERE* 動詞に由来する語尾 *-et* を保存している形式は以下に示す 1 例のみである：*bolet* (CV: 1) < **VOLET* (inf. **VOLĒRE*) 「欲する」。その他の例は *-ERE* 動詞、*-ĒRE* 動詞どちらに由来する動詞であっても語尾 *-it* を持つ⁷：*connoschit* (CV: 5) cfr. *COGNOSCIT* (inf. *COGNOSCĒRE*) 「知る」、*badit* (CV: 15) cfr. *VADIT* (inf. *VADĒRE*) 「行く」、*tenit* (CV: 14iv, 20iii), *tenit(si)* (CV: 2ii) cfr. *TENET* (inf. *TENĒRE*) 「持つ」、*apartenit* (CV: 20ii, 21ii) cfr. *ADPARTINET* (inf. *ADPARTINĒRE*) 「属する」、*pertenit* (CV: 12) cfr. *PERTINET* (inf. *PERTINĒRE*) 「属する」、*clonpit* (CV: 2, 9, 19ii), *clompit* (CV: 9iii, 11iii, 17ii, 19, 21) cfr. *CLOMPET* (inf. *COMPLĒRE*) 「終結する」、*bolit* (CV: 3, 4, 6, 7, 8, 9, 10, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18) cfr. **VOLET* (inf. **VOLĒRE*) 「欲する」。

このように、古カンピダーノ方言ではほぼ全ての形式において語尾 *-it* が観察される。2. 2. で示したように、第 2 変化動詞の不定詞は *-ĒRE* 動詞のアクセント位置を保存しているので、

語尾についても -ERE 動詞に由来する -it を継承していると推定できるかもしれない。しかしながらカンピダーノ方言では「語末音節高母音化」という変化が生じたことを見過ごしてはならない。本稿では、古カンピダーノ方言の 3 人称単数語尾 -it は -ERE 動詞の語尾を継承しているのではなく、-ERE 動詞に由来する語尾 -et における語末音節高母音化によって生じたものであるという仮説を立てる。以下、この仮説の妥当性を検討していく。

カンピダーノ方言では、語末音節の e と o はそれぞれ i と u になるという変化が生じた。古カンピダーノ方言で既にこのような変化は観察され、例えば以下のような例がある (cfr. Guarnerio 1906: 202, Viridis 1978: 34-35) : parti (CV: 2, 3, 4, 8, 9, 13, 14, 15, 16, 17 ecc.) < PARTE(M) 「部分」, sorti (CV: 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 14, 19, 21) < SORTE(M) 「偶然に」, potestandu (CV: 1, 3, 4, 5, 7, 8, 9, 13, 14, 15 ecc.) < POTESTANDO 「統治している」, berbeis (CV: 2, 13) < BERBECES 「羊」, serbus (CV: 4, 5, 6, 7, 12, 13, 14, 16, 18, 19) < SERVŌS 「奴隷」, bullu (CV: 11) < BULLO 「印を押す」, firmu (CV: 11, 18) < FIRMŌ 「署名する」。

3 人称単数語尾 -it も上に示した例と同様、-ERE 動詞に由来する語尾 -et における語末音節高母音化によって生じたと考えることができる。この見方の妥当性は、-ERE 動詞に由来する動詞の 3 人称複数の語尾によって部分的に裏付けられる。

古カンピダーノ方言において -ERE 動詞に由来する動詞の 3 人称複数は確認されなかったが、現代カンピダーノ方言では、-ERE 動詞に由来する動詞と同様、語尾 -int を持つ : camp.mod. bédint. しかしながら、ラテン語の -ERE 動詞の 3 人称複数語尾は -UNT であり、語尾 -int は -UNT から音変化によって導くことはできない⁸。従ってこの -int は、-ERE 動詞の -ENT における語末音節高母音化によって生じたと考えざるを得ない (i.e. camp.mod. bédint < *bédent ← lat. VENDUNT)⁹。3 人称複数におけるこのような見方と並行的に捉えるのであれば、3 人称単数の語尾 -it も同様に -et における語末音節高母音化によって生じたと推定できる。

この見方は、第 1 変化動詞の接続法現在の語尾からも支持される可能性がある。ここで、本節の冒頭で示した、第 2 変化動詞の直説法現在における 3 人称単数語尾 -et/-it の CV における分布に着目してみると、-et はその最初期のテキスト、すなわち CV: 1 (1070-1080 年) のみ現れ、-it はそれ以降のテキスト、すなわち CV: 2 (1114-1120 年) 以降に現れるという年代的な偏りが見られる。一方、CV において第 1 変化動詞の接続法現在の 3 人称単数及び複数には以下のような用例が確認される。その語尾は -et/-ent であり、これらはラテン語の -et/-ent に遡る。これに加えて、-it / -int を持つ形式も観察される : turbet (CV: 1) < TURBET (inf. TURBĀRE) 「妨げる」, castigit (CV: 3, 4, 6, 7, 8, 9, 12, 13, 14, 15, 16, 17) < CASTICET (inf. CASTICĀRE) 「保存する」, getit (CV: 18) < JECTET (inf. JECTĀRE) 「投げる」, usit (CV: 1) < USET (inf. USĀRE) 「使う」, torrit(si) (CV: 17), torrit (CV: 20) < TORNĀRE) 「戻る」, incungent (CV: 1) <

*INCUNIENT (inf. *INCUNEARE) 「保持する」, *trebulent* (CV: 1) < TRIBULENT (inf. TRIBULARE) 「小麦を刈り取る」, *usent* (CV: 1) < USENT (inf. USARE) 「使う」, *dent* (CV: 1) < DENT (inf. DARE) 「与える」, *arint* (CV: 1) < ARENT (inf. ARARE) 「耕す」, *iuigint* (CV: 21) < JUDICENT (inf. JUDICARE) 「判決を下す」, *leint* (CV: 21), *lebint*(si) (CV: 21) < LEVENT (inf. LEVARE) 「奪う」, *messint* (CV: 1) < MESSENT (inf. MESSARE) 「収穫する」, *turbint* (CV: 21) < TURBENT (inf. TURBARE) 「妨げる」.

上に示した第 1 変化動詞の接続法現在の語尾は, -ARE 動詞の語尾 -ET / -ENT に由来するので, -it / -int は -ET / -ENT における語末音節高母音化によって生じたことは明らかである. そして, 第 1 変化動詞の接続法現在における -et / -ent と -it / -int の年代的な分布は, 第 2 変化動詞の直説法現在の -et と -it に類似した特徴を示している. すなわち -et / -ent は最も古い時代に書かれた CV: 1 にのみ現れ, -it / -int は主により新しい時代に書かれたテキスト, とりわけ CV: 21 に現れる. このような接続法現在の語尾の分布を考慮に入れるのであれば, 第 2 変化動詞の直説法現在の -it / -int も同様に語末音節高母音化によって生じたものであり, -ERE 動詞の語尾を受け継いだものではなく, -ERE 動詞に由来するものであるという推定が成り立つ¹⁰.

3. 2. 1 人称複数及び 2 人称複数

3. 2. 1. 古ログドロー方言

古ログドロー方言における 1 人称複数の用例は計 5 つと少ないが, うち 4 例で -ERE 動詞に由来する語尾 -emus が用いられている. 残りの 1 例では -imus が観察されるが, この動詞は -IRE 動詞由来であるので, その語尾 -IMUS を継承していると考えられる: *ponemus* (CSP: 88. CSNT: 286) < PONĪMUS (inf. PONĒRE) 「置く」, *keremus* (CSP: 284) ← QUĀERĪMUS (inf. QUĀERĒRE) 「欲する」, *fakemus* (CSNT: 286) ← FACĪMUS (inf. FACĒRE) 「作る」, *afferimus* (CSNT: 286) < *AFFERĪMUS (inf. *AFFERĪRE) 「運ぶ」.

しかしながら 2. 1. で示したように, 現代ログドロー方言では 1 人称複数語尾は -imus である. Blasco Ferrer (1984: 103) によると, 第 2 変化動詞における -imus の用例は CSP 及び CSNT よりも少し年代が下った別の文献から観察され (e.g. *uolimus*, *bolimus*), この語尾は後に触れる 2 人称複数語尾 -ites からの類推によって二次的に得られたものであるという. 一方, Wagner (1938-1939: 142) では -imus は第 3 変化動詞の 1 人称複数 -imus からの類推によるものと推定されている. このように, 第 2 変化動詞における -imus の正確な由来は明らかでない. いずれにせよ, -imus は比較的時代が下ってから出現するということ, アクセントは語幹ではなく語尾にあるということを考慮すると, -ERE 動詞の -IMUS に直接由来するという可能性は低い.

次に 2 人称複数について見る。ラテン語の -ERE 動詞と -ĒRE 動詞の 2 人称複数語尾はそれぞれ、-ETIS と -ITIS である。これに対して、古ログドローロ方言では -ites という形が観察される：bolites (CSP: 205), uolites (CSP: 205, 322) < *VOLĒTIS (inf. *VOLĒRE) 「欲する」, fakites (CSP: 205) < FACĪTIS (inf. FACĒRE) 「作る」, cherites (CSP: 394), kerites (CSNT: 332) < QUĀERĪTIS (inf. QUĀERĒRE) 「欲する」, naskites (CSP: 79) < NASCĪTIS (inf. NASCĒRE) 「生まれる」。

サルデーニャ語の音変化規則を考慮に入れた場合、-ites は -ETIS と -ITIS どちらの語尾からも導くことはできない。しかしながら初頭母音に注目すれば、-ites は -ĒRE 動詞の -ITIS に関連付けられる可能性がある。ただしこの場合、-ites の語末音節母音における変化 $i > e$ を説明しなければならない。そこで、-ites の i にアクセントがあると考え、アクセントのある i に後続する音節の e は異化によって i から変化したと想定する (i.e. $i...i > i...e$)¹¹。本来アクセントを持たなかった -ITIS の I がアクセントを持つようになった要因として、-ERE 動詞の -ETIS との混同が考えられる。すなわちアクセント位置は他の人称と同様、-ERE 動詞のものを受け継いだが、母音の音色については -ĒRE 動詞のものを継承したと考えることで、-ites の形成過程に対する 1 つの説明が得られる。

-ites の形成に対する異化による説明は、Wagner (1938-1939: 142) によって報告されている、Urzulei¹² という集落で話されるログドローロ方言の変種に見られる 2 人称複数 fāgiōis (< lat. FACĪTIS) 「作る」, abērriōis (< lat. *APERĪTIS) 「開く」という形式によって支持される。この方言における第 2 変化動詞の 2 人称複数母音の音色のみならずアクセント位置も -ĒRE 動詞のものを保存している。従って語尾 -iōis の初頭母音にアクセントがないため異化が生じず、語末母音 i を保存している。

また、第 3 変化動詞の 2 人称複数語尾でも同様の異化が観察される。例えば、seruites (CSP: 394), log.mod. serviōes 「仕える」はラテン語 SERVITIS に由来するが、アクセントのある i からの異化によって語末音節の i は e に変化したと考えられる。第 3 変化動詞の 2 人称複数語尾 -ites はラテン語 -ITIS に遡るので、初頭の I にアクセントがあったことに疑いはない。

3. 2. 2. 古カンピダーノ方言

古カンピダーノ方言における 1 人称複数には、以下の用例が確認された：fagimus (CV: 1) < FACĪMUS (inf. FACĒRE) 「作る」, fagemus (CV: 1iii, 18iii) ← *id.*。このように、全 7 例中 6 例で -ĒRE 動詞の -ĒMUS に由来する語尾の一般化が観察される。これに対して 1 つの例で -ĒRE 動詞に由来する -imus が観察される。CV の最も古いテキストに現れていることも考慮すると、-ĒRE 動詞の語尾が残存していることを示唆している。

1.2. で示したように、現代カンピダーノ方言では 1 人称複数語尾は *-éus* である (camp.mod. *tenéus, bendéus*). この語尾は *-emus* における母音間の *m* の消失によって導くことができる。しかしこの変化は古カンピダーノ方言ではまだ観察されず、より新しい時代に起こったものであるといえる。

古カンピダーノ方言では 2 人称複数の用例がないので、その変化の過程について知ることができない。しかしながら、他の人称語尾と同様、*-ERE* 動詞の語尾を継承していると考えられるのであれば、*-ETIS* における母音間の *t* の消失によって現代カンピダーノ方言の形式 *-éis* を導くことができる。一方、ログドーロ方言では 2 人称複数において *-ERE* 動詞の要素を継承している (→ 3. 2. 1.)。すなわち、人称語尾の由来に関して、2 人称複数において両方言の間に差異が観察される (cfr. Lausberg 1966: 339)。

4. 結論

本稿の総括として、古ログドーロ方言、古カンピダーノ方言それぞれにおける第 2 変化動詞の直説法現在の人称語尾を示す：

<古ログドーロ方言>

1sg. *-o¹³*, 2sg. *-es (-is)*, -3sg. *et (-it)*, 1pl. *-emus*, 2pl. *-ites*, 3pl. *-en*

<古カンピダーノ方言>

1sg. *-u*, 2sg. *---*, -3sg. *et ~ -it*, 1pl. *-emus (-imus)*, 2pl. *---*, 3pl. *-ent ~ -int*

そして本稿の主張は以下の通りである：

- 1) 古サルデーニャ語では既にラテン語の *-ERE* 動詞の人称語尾の一般化は始まっていた。しかしながら *-ERE* 動詞に由来する語尾も僅かながら残存している (古ログドーロ方言の 2 人称、3 人称単数と古カンピダーノ方言の 1 人称複数)。
- 2) カンピダーノ方言に見られる 3 人称語尾 *-it / -int* は、*-ERE* 動詞の *-it / -int* を継承しているのではなく、語末音節高母音化の影響によるものである可能性が高い。この主張は、*-ERE* 動詞に由来する第 2 変化動詞の 3 人称複数語尾 *-int* と、第 1 変化動詞の接続法現在の 3 人称語尾 *-et / -ent* と *-it / -int* の年代的な分布によって支持される。
- 3) 古ログドーロ方言の 2 人称複数語尾 *-ites* は、アクセント位置については *-ERE* 動詞のものを、初頭母音については *-ERE* 動詞のものを継承しており、語末音節の *e* はアクセントのある *i* からの異化によって生じたと推定した。

註

* 本稿は、日本ロマンス語学会第 46 回大会 (2008 年 5 月 17-18 日 東京大学) における口頭発表資料に加筆、修正を施したものである。また本稿は、平成 20 年度笹川科学研究助成 (研究題目: 「サルデーニャ語における動詞形態論の歴史的研究」) の援助を受けている。

略号一覧: camp. = カンピダーノ方言 (campidanese), inf. = 不定詞 (infinito), lat. = ラテン語 (latino), log. = ログドーロ方言 (logudorese), mod. = 現代 (moderno), pl. = 複数 (plurale), sg. = 単数 (singolare), 1-3 = 人称。

¹ 本稿では古ログドーロ方言の文献として *Condaghe di San Pietro di Silki* (1073 年～ 12 世紀後半) (CSP = Delogu 1997) と *Condaghe di San Nicola di Trullas* (1113 年～ 13 世紀後半) (CSNT = Merci 2001) を用い、古カンピダーノ方言の文献として *Carte Volgari* (1070 年～ 1226 年) (CV = Solmi 1905) を用いる。それぞれの文献の詳細については紙面の都合上省略する。

² サルデーニャ語の史的形態論に関する先行研究には、Wagner (1938-1939), Blasco Ferrer (1984) などがある。しかしながらそれらの記述は断片的なものである。従って本稿では先行研究の概観は行わず、関連する箇所を逐一参照することにする。また、古サルデーニャ語の動詞に対応するラテン語の形式については Wagner (1960-1964) を参照した。

³ ラテン語 HABERE 「持つ」に由来する動詞も第 2 変化動詞に属するが、その使用頻度の高さゆえに一般的に不規則動詞として扱われる。従って HABERE に由来する動詞の諸形式については次稿に譲りたい。

⁴ 現代ログドーロ方言でも -IRE 動詞に由来する第 2 変化動詞の人称語尾は -IRE 動詞のものを継承している: log.mod. 2sg. bénis, 2sg. bénit, 3pl. bénint (cfr. Pittau 2005: 99)。

⁵ 現代ログドーロ方言 -ent を考慮に入れると、古ログドーロ方言の語末の t の消失は音韻的なものではなく、表記の上でのことであるといえる (cfr. Guarnerio: 1905: 37)。

⁶ 次の形式では語尾 -in が観察されるが、3 人称単数 venit 等の場合と同様、-IRE 動詞の人称語尾を継承していると考えられる: uenin (CSP: 413) < VENIUNT (inf. VENIRE)。サルデーニャ語の第 3 変化動詞の 3 人称複数語尾は -int である。ラテン語の -IRE 動詞の -IUNT に含まれる U はサルデーニャ語において消失した。この変化はおそらく -IRE 動詞の U を持たない他の人称語尾 (lat. 2sg. -IS, 3sg. -IT, 1pl. -IMUS, 2pl. -ITIS) からの類推によるものと考えられる (cfr. Lausberg *op.cit.* 369)。

⁷ ログドーロ方言の場合と同様、-IRE 動詞から第 2 変化動詞に移行した動詞は、-IRE 動詞の語尾 -IT を継承している: benit (CV: 11) < VENIT (inf. VENIRE), ferit (CV: 14v) < *FERIT (inf. *FERIRE)。

⁸ FACERE や JACERE 「横たわる」など、-ERE 動詞の中で 1 人称単数、3 人称複数語尾がそれぞれ -IO, -IUNT (FACIO, FACIUNT / JACIO, JACIUNT) であるタイプがある。しかしながら Lausberg (*op.cit.* 371) によると、このタイプの動詞の 3 人称複数 -IUNT における I は、I を持たない形 (-UNT) からの類推によってラテン語の段階で消失したという。このような変化によって *facunt, *jacunt が得られ、VENDUNT などと同様の変化を経たと考えることができる。また、このような類推のプロセスは、註 6 で示した、-IRE 動詞の -IUNT における u の消失と対照的であるといえる。

⁹ -ERE 動詞に由来する動詞の 3 人称複数に 2 例確認された。双方とも語尾 -int を持つ：apartenint (CV: 20) < ADPARTENENT (inf. ADPARTENÈRE) 「属する」, bolint (CV: 19) < *VOLENT (inf. *VOLERE) 「欲する」。これらの形式に含まれる -int もやはり語末音節高母音化によって生じたと考えられる。

¹⁰ usit, arint のように, -it / -int を持つ形式が CV: 1 に現れていることも事実である。また, 高母音化が生じていない名詞もわずかに確認されるが, それらは比較的新しいテキストにも現れる：parte (CV: 1, 2, 10), sorte (CV: 10), potestando (CV: 10, 11, 12)。このように, CV では語末音節高母音化に関して相当の揺れがあったといえる。従って, 高母音化が生じている形式と生じていない形式の年代的な分布は規則的なものではなく, 傾向という程度のものかもしれない。しかしいずれにせよ, -et あるいは -ent が最初期のテキストにしか現れないという事実は注目すべきである。

¹¹ log.mod. úlumu 「楡」に対して, いくつかの方言変種では úlimu という形式が確認されるという。Wagner (1984: 68) はこの形式に対して異化による説明を与えている (ú...u > ú...i)。サルデーニャ語における異化の例としては他にも lat. MANĒANU(M) > camp.mod. mendzǎnu 「朝」(a...á > e...á), lat. COLŌRE(M) > calóri 「色」(o...ó > a...ó) などがある (cfr. Viridis *op.cit.* 31)。

¹² サルデーニャ島の東部, オリアストラ (Ogliastra) 地方にある村である。この地域のサルデーニャ語は極めて保守的であることで知られている。Wagner (1938-1939: 142) によると, オリアストラ地方におけるいくつかの方言変種では第 2 変化動詞の 1 人称複数 -emus が保存されているという。

¹³ 1 人称単数については取り立てて言及することは少ない。ログドロー方言では -o になり, カンピダーノ方言では語末音節高母音化 (→ 3. 1. 2.) によって -u になる：potho (CSP: 66) < *POTEŌ 「～できる」, fazzu (CV: 2ii, 19ii, 21) < FACIŌ 「作る」。

参考文献

- Blasco Ferrer, E. 1984. *Storia linguistica della Sardegna*. Tübingen: Max Niemeyer.
- Delogu, I. 1997. *Il condaghe di San Pietro di Silki. Testo logudorese inedito dei secoli XI-XIII*. Sassari: Dessì.
- Guarnerio, P. E. 1905. "La lingua della <Carta de Logu> secondo il manoscritto di Cagliari." Besta, E. / Guarnerio, P. E. *Carta de Logu de Arborea. Testo con prefazioni illustrative*. Sassari: Dessì. 1-82.
- . 1906. "L'antico campidanese dei sec. XI-XIII secondo <Le antiche carte volgari dell'archivio arcivescovile di Cagliari.>" *Studj romanzi* IV. 189-259. Roma.
- Lausberg, H. 1966. *Lingüística románica II. Morfología*. Madrid: Gredos.
- Merci, P. 2001. *Il Condaghe di San Nicola di Trullas*. Nuoro: Ilisso Edizioni.
- Meyer-Lübke, W. 1902. "Zur Kenntniss des Altlogudoresischen." *Sitzungsberichte der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften*. Band CXLV. Vienna: C. Gerold's Sohn.
- Pittau, M. 2005. *Grammatica del sardo illustre*. Sassari: Carlo Delfino.
- Solmi, A. 1905. "Le carte volgari dell'archivio arcivescovile di Cagliari. Testi Campidanesi dei secoli XI=XIII." *Archivio storico italiano* V: 35. 277-330.
- Viridis, M. 1978. *Fonetica del dialetto sardo campidanese*. Cagliari: Edizioni della Torre.
- Wagner, M. L. 1938-1939. "Flessione nominale e verbale del sardo antico e moderno." *Italia dialettale* 14. 93-170, 15. 1-30.
- . 1960-1964. *Dizionario etimologico sardo (DES)*. Heidelberg: Carl Winter.
- . 1984. *Fonetica storica del sardo. Introduzione, traduzione, e appendice di Giulio Paulis*. Cagliari: Gianni Trois (tradotto da *Historische Lautlehre des Sardischen*. Halle: Max Niemeyer 1941.).